

千歳村と兵事（二）

及川 琢英

千歳市総務部市史編さん担当

編集員

はじめに

第一章 徴兵

第二章 召集

第三章 在郷軍人会千歳村分会の活動 — 以上前号 —

第四章 満州事変以降の在郷軍人および分会の活動 — 以下本号 —

第五章 アジア・太平洋戦争と兵力動員

おわりに

第四章 満州事変以降の在郷軍人および分会の活動

満州事変の勃発を受けて、在郷軍人は活発に活動した。一九三一年九月二十八日、第七師管連合支部管下、陸軍少将・藤田直太郎ほか「在郷軍人十一万九千九百三名」は、

一、吾人ハ此際日支両国間ノ諸懸案ノ徹底的解決ヲ要望シ且之カ実現ヲ見サル内ハ関東軍ヲシテ一步ト雖現在ノ態勢ヨリ後退セシメサランコトヲ主張ス

二、国際連盟又ハ第三国ノ干渉ノ如キハ断然之ヲ排除シ挙国一致ノ下ニ自主

独立ノ立場ヨリ之カ解決ヲ提唱ス

との決議を発した^①。十月三日、札幌支部管下「在郷軍人有志三万二千名」も、

一、滿蒙諸懸案ノ根本的解決ヲ見ル迄第三者ノ容喙ヲ拒絶シ関東軍ハ断シテ現在ノ態勢ヲ確保スヘシ

二、国防ノ危機ニ省覚シ兵器航空ニ関スル国防充実ノ促進及外地兵備ノ刷新ヲ期ス

との決議を発し、また札幌市・室蘭市・石狩・空知・胆振・浦河支庁管内在郷將校同相当官も同月、「国防観念ヲ正導シ大ニ世論ヲ喚起シ純正ナル国論ノ統一ヲ図」るとする宣言をしている^②。とりわけ「兵器航空ニ関スル国防充実」が挙げられているのが注目される。千歳村では、三三年二月より陸軍飛行場や飛行隊設置の請願が何度もなされることになるが、^③そのような「国防充実」が叫ばれる状況と無縁ではなかったであろう。

三一年十月十二日、全国の連合支部以下各団体の決議を受けて、在郷軍人会会長・鈴木莊六は、首相、外相、内相、蔵相、陸相、海相、枢密院議長、参謀総長、海軍軍令部長を訪問し、在郷軍人の「決意ヲ綜合」した具申書を手交した^④。

ちようど事変勃発と同時期の『良民』一七九号（一九三二年九月）において、在郷軍人会本部囑託の陸軍砲兵大佐・遠藤壽儼は「滿蒙の真相」と題する論稿を発表している。遠藤は、「滿蒙」の面積・人口密度と資源が豊富な点を挙げ、「今や我国は、人口過剰に、就職難に、生活難又衣食住其他諸原料の不足に、絹布類以外殆んど何一つとして、我国のみで自給自足の

出来るものは無い」として、「行詰りたる我經濟困難の打開乃至生存上の活路は、最早之を滿蒙に求むるの外はない」と主張する。しかるに「滿蒙」においては、とくに米・露が「我儘勝手な振舞を為しつゝあるも、支那官憲は只その為すが俛に放任し」ている状態であり、これは「我国外交の不振拙劣に依ると共に我母国々民が滿蒙問題に対して寂として声なきが為である」と述べる。日本国内は、「只吹き荒さむ悪風潮に感染しつゝ実に情落も極りなく全く麻痺睡眠の状態に陥りつゝある」一方で、中国では、「日本何事も為し得ずと高を見縊つて」、「滿蒙の大陸から我帝国の勢力を駆逐せんとする魂胆」が現れているとする。そして露中間の東清鐵道条約が中国政府に権利回収を許す期限が一九三七年からであることを強調し、その際には米国が「必勢的優勢なる海軍を利用し」、必ず中国を「後援」するであろうとして、「斯る時機に於て物を言ふのは只独り有力なる武装のみである」、「須らく我國民たるものは茲に目醒め断固たる決心の下に各位の奮起を切望して止まざる次第である」と結論する。事変が関東軍の謀略によるものと知らされなかつたことと合わせて、遠藤のような主張は在郷軍人の思想に大きく影響したものと考えられる。⁽⁵⁾

- 一九三二年六月五日には、帝国在郷軍人会全国大会が奉天で開催され、
- 一、吾等八帝国力速ニ滿洲国ヲ承認シ極力其ノ發達ヲ援助スルコトヲ期ス
 - 二、吾等八国防ノ完備ニ関シテハ政党政派ヲ超越シテ國論ノ正導ニ努メ特ニ滿蒙ニ対スル國民ノ認識ヲ深厚ナラシメ以テ帝國永遠ノ平和ヲ期ス
 - 三、帝國八今ヤ未曾有ノ困難ニ直面ス吾等八益々一致團結國運ノ進展ニ力メ以テ 聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

との決議をなした。⁽⁶⁾

同年十月十五日、「札幌支部管下在郷軍人四万人」も、

「リットン」報告ヲ默殺シ帝國規定方針ヲ飽ク迄主張シ断々平トシテ之ヲ貫徹ヲ期ス

二、滿洲国々家ノ健全ナル發達ニ対シ國民与論ノ中堅トナリ大ニ寄与貢獻センコトヲ期ス

三、現下重大ナル危機ニ直面セル情勢ニ鑑ミ帝國国防ノ拡充刷新ヲ期ス

と決議している。⁽⁷⁾

第七師団からは「滿洲」へ、混成第一四旅団が派遣された。混成第一四旅団は、旅団司令部、歩兵第二五連隊第二大隊、同第二六連隊第二大隊、同第二七連隊第一大隊、同第二八連隊第二大隊、騎兵第七連隊第二中隊、野砲兵第七連隊第二大隊、旅団通信隊、同自動車班、同衛生班から編成された。三三年九月二十四日編成を終え、二十七日小樽を出航した。十月三日奉天着、十一日より作戦を開始し、奉天より東に針路をとり、通化を指して進軍した。作戦第三日目の十三日、關家保子で中国軍兵力約三〇〇と交戦したが、戦死者一名を出した。⁽⁸⁾ そのうちの一人が、千歳村出身の騎兵曹長・大畠政勝であった。⁽⁹⁾

三三年二月、東三省を占領した日本軍は、熱河省が「滿洲国」の領土であるとして、事変の「完成」を期し侵攻を開始したが、同作戦においても、千歳村出身者の戦死者が出ている。混成第一四旅団は第八師団、第一六師団などともに熱河作戦に参加し、中国軍を追って長城線に迫った。同旅団は三月、喜峰口を突破し、長城線を超えて追撃中の四月十二日、灤陽城附近において、歩兵第二八連隊歩兵伍長・近藤國定が戦死した。⁽¹⁰⁾ 同年五月三十一日、塘沽停戦協定が結ばれて、滿州事変は一応の区切りをみるが、

札幌支部管内において、五月二十三日までに公報を受けた者は、戦死五三名、病死一一名に上った。

在郷軍人にとって「満洲国」の建国は、就職先の拡大も意味していた。

『良民』二二五号（一九三四年八月）では、職業輔導部「満洲国軍官、軍需候補者採用」として、

一、満洲国軍官、軍需候補者は大体前年同様の要領に依り軍官、軍需候補者約

三百名全国より募集せらるゝ筈なるも募集時期は未だ確定せず。

二、渡満就職者は職務の如何に不拘何時にても警備に任ずるの覚悟を以て軍服を着用或は携行するを可とす。

という記事を掲載している。多くの在郷軍人が「満洲国」での就職を希望したようで、関東軍参謀長は、無計画な「渡満」の弊を訴えて次のように述べている。

近来内地在住ノ陸軍将校其他高官ノ紹介状ヲ携行シ無計画ニ渡満シ軍ニ依頼シテ満洲国政府官吏ニ就職セントスル者頓ニ増加セリ日系官吏ハ現在殆ント過飽和状態ニシテ目下之カ整理中ナル実状ニ在リテ渡満後困却セル向モ少シトセス

『良民』誌上においても、職業輔導部「漫然渡満する勿れ」として次のように注意している。

満洲に就職を希望し、漫然渡航するもの絶へざる状況にて軍部等に迷惑をかけるもの甚だ多し。殊に幹部候補生出身者にして軍服着用の俣渡満すれば就職

に可能性多きものと即断しあるものあり、斯の如き誤解なき様注意を望む。

一九三七年、日中全面戦争勃発の際には、警察官が多数召集され、「在郷下士官兵の警察官志願者は実に千歳一遇の好機だから此際奮つて受講せられたし」と、帝国軍人後援会が行う警察官受験のための講習の受講が呼びかけられている。

【軍人会館】

二・二六事件の際、戒厳司令部が置かれた、現在の九段会館（東京都千代田区）は、当時、軍人会館と呼ばれた。軍人会館は、一九二八年、昭和天皇即位記念事業の一環として、在郷軍人会会員の団結を示すために建設が立案されたものであった。建設費は一五四万円と見積もられ、在郷軍人会正会員より八四万円（一人当二九銭）、陸海軍現役軍人寄付より二〇万円を集め、五〇万円は一般の寄付を募ることとなった。札幌支部には、九二二四円一〇銭が割り当てられた。

一九三〇年六月の時点で、満鉄より一〇〇万円、陸海軍現役軍人より九万四〇〇〇余円、一般寄付一二万四〇〇〇余円、会員出金三二万八〇〇〇余円が集った。札幌支部では同時点で五二分会が完納していた。千歳村分会は、ほかの二五分会とともに同年十月までに完納した。三二年五月頃には、「会員協力克ク負担額ヲ完納」したとして在郷軍人会会長より、千歳村分会を含む札幌支部管下の九五分会に謝状が送られている。軍人会館は、三四年四月に落成し、事業を開始した。会議室や食堂、喫茶室、娯楽室、宿泊室などの施設を備えており、在郷軍人会会員や現役軍人などは特別料金での宿泊が可能であった。

	分会長		分会副長		出典 (良民号数)	
千歳村分会	1923.10	鈴木恭次郎	後備歩兵上等兵	細川孫作	予備輜重兵上等兵	84
	1924.10	細川孫作		渡部悦		96
	1929.4.1	細川孫作	後備輜重兵伍長	渡部忱	後備歩兵上等兵	152
	1930.6.15	細川孫作	後備輜重兵伍長	欠員		165
	1931.6.1	細川孫作	〃	西野忠義	後備上等看護卒	177
	1933.6.20	細川孫作	〃	廣重兼太郎	予備輜重兵軍曹	202
	1934.6.1	細川孫作	元輜重兵伍長	廣重兼太郎	予備輜重兵軍曹	214
	1937.6	細川孫作	元輜重兵伍長	廣重兼太郎	後備輜重兵軍曹	251
	1938.5			小栗行男	後備輜重兵伍長	262
	1938.7	細川孫作	元輜重兵伍長	小栗行男	後備輜重兵伍長	264
	1939.9			前田政太郎 西野忠義	後備輜重兵上等兵 後備衛生上等兵	266
千歳鉦山分会	1937.6	大門徳次郎	予備砲兵少尉	工藤貴當 柏倉又作	後備歩兵准尉 予備歩兵准尉	251
	1937.7	〃	〃	坂庭定治	予備輜重兵准尉	253
	1937.12	〃	〃	大野一郎	予備工兵准尉	257
	1938.6			井上俊一	後備工兵少尉	263
	1938.7	大門徳次郎	予備砲兵少尉	井上俊一	後備工兵少尉	264
	1938.8			大淵四郎	後備砲兵曹長	265
	1939.1	春日不二夫	〃	工藤忠	予備憲兵伍長	270
	1939.7	工藤忠	予備憲兵伍長			276
	1939.8	萩原清三郎	予備歩兵少尉			277
	1939.11			春日不二夫 工藤忠		280
	1940.6			松本末吉	後備工兵上等兵	287

(注) 1920年代の分も再掲した。

表 - 12 分会長・分会副長 (千歳村・千歳鉦山)

【分会の活動】

表・12は、千歳村分会および千歳鉦山分会の分会長・副長を示すものである。千歳村分会の会長には一九三〇年代においても、二〇年代に引き続き、細川孫作が就いている。一九三六年陸軍特別大演習の際、札幌飛行場における「御親閲式」では、千歳村分会八〇名、千歳鉦山分会二四名は、手稲村分会三三五名とともに、第一集団第四大隊第五中隊に所属したが、その中隊長を細川孫作が務めた。一九三三年より三八年まで副長を務めた廣重兼太郎は、細川と同じく兵科は輜重兵であった。廣重の後の小栗行男、前田政太郎も輜重兵である。三六年には、千歳村分会顧問として、畠山定吉、中川種次郎、渡部榮藏、谷本亀、窪田與三左衛門、高橋徳久、清水市郎、福岡辰吉が就任している。

一方、千歳鉦山分会の分会長・副長は入れ替わりが激しく、千歳村分会と比べて階級は高い傾向にある。三八年には、千歳鉦山分会顧問として深津彬が就任した。設置されたばかりの千歳鉦山分会には、表・13のように千歳鉦山や分会幹部等から寄付がなされている。千歳鉦山からのほか、各個人、分会長や副長自身の名前もみえる。

千歳鉦山分会の活動に関しては、『良民』の分会活動欄への掲載がみられ、活動の一端が判明する。

第二五四号（一九三七年九月）には、

八月六日模擬充員召集実施の成績左の如し。
左記

- 一、令達者 一〇六名
- 二、応召者 一〇一名
- 三、事故者 五名

寄付者	金額 (円)	出典 (良民号数)
千歳鉱山札幌事務所	100.00	246
中島門吉	50.00	
千歳鉱山美笛鉱業所	17.20	
同 福島茂三郎	5.00	
予備歩兵伍長 眞鹽正之 福田寅吉	10.00	247
板東武雄	10.00	256
工藤貴富	5.00	257
日南田麒麟繁 中村組代表菊池要吉	5.00	261
坂庭定治	10.00	265
工藤忠	10.00	

表-13 寄付金(千歳鉱山分会)

及時局の講話を聴取し之れ又甚大の好果を与へたり。

また二六四号(一九三八年七月)には、

五月十五日 海軍記念日繰上実施、海軍札幌人事課より講師映画班の派遣を受け、軍事講演、映画会を実施、聴講者約三〇〇、映画観覧者約八〇〇、多大の感動を与へ盛会裡に散会せり。

とあり、盛んに国防思想の普及が図られたことがわかる。

第五章 アジア・太平洋戦争と兵力動員

徴兵や召集の概要についてはすでに述べたとおりであるが、三〇・四〇

(届出不応召 演習召集一、本籍
地点呼散会三、疾病一)

四、遅刻者 なし

五、指導要領

簡閲点呼場に召集し点呼参会者と共に点呼執行官の査閲を受け時局に対する講話を聴取せしめたるを以て其結果得る処大にして好果を収めたるものと認む。

六、一般民衆への反映僻遠の地に在りて事局問題或は国防的思想に無頓着なりしも目前に展開せられたる簡閲点呼模擬召集の査閲

年代においてはますます多くの人員が動員されていった。千歳村の壮丁の受験地については、一九二四年以降、恵庭で受験したと先に述べたが、三〇年代以降になると、年によっては恵庭に徴兵署が設置されなかったことが確認できる。一九三四年には恵庭には設置されていない。四二年には、恵庭国民学校に徴兵署が開設されたことがわかる。

【壮丁受験人員】

	壮丁 総数	検査成績					徴集 延期	
		甲	一乙	二乙	丙	丁		
1929	本籍	52	12	6	10	16	4	4
	入寄留	6	3	-	3	-	-	-
1930	本籍	55	25	5	10	10	2	3
	入寄留	7	4	2	1	-	-	-
1932	本籍	61	20	6	10	10	10	5
	入寄留	6	2	-	2	2	-	-
1933	本籍	40	16	2	13	9	-	-
	入寄留	15	3	-	3	5	4	-
1934	本籍	39	13	4	11	8	2	1
	入寄留	12	8	1	2	-	1	-

【徴兵】

	壮丁 総数	徴集人員				猶予	延期	徴集 免除	兵役 免除	計
		現役	補充	要員 超過	計					
1929	52	9	13	6	28	-	4	16	4	24
1930	55	14	11	15	40	-	3	10	2	15
1932	61	13	8	22	43	-	-	9	9	18
1933	40	9	11	10	30	-	-	10	-	10
1934	39	7	17	4	28	-	1	8	2	11

(注1)『千歳村勢一斑』昭5、昭6、昭8、昭10による。

(注2)1932年は、壮丁受験人員欄と徴兵欄の徴集延期者が合っていないが、そのまま記載した。

表-14 徴兵検査受験人員・徴集人員(1929~34・千歳村)

(単位：%)

	甲	一乙	二乙	計	丙	丁	戊
札幌市	23.5	10.4	22.5	56.4	38.6	5.0	0.1
石狩支庁							
浜益村	26.2	15.5	19.0	60.7	31.0	8.3	
厚田村	42.6	13.1	21.3	77.0	14.8	8.2	
石狩町	23.3	14.0	29.1	66.3	25.6	7.0	1.2
江別町	33.1	14.3	22.3	69.7	26.3	3.4	0.6
新篠津村	44.0	4.0	16.0	64.0	32.0	4.0	
当別町	37.5	6.7	23.3	67.5	26.7	5.8	
広島村	36.4	9.1	20.5	66.0	20.5	13.6	
恵庭村	35.2	8.5	21.1	64.8	25.4	9.9	
千歳村	31.6	10.5	10.5	52.6	36.8	10.5	
札幌村	27.0	9.5	25.7	62.2	25.7	12.2	
篠路村	34.9	7.0	23.3	65.2	30.2	4.7	
琴似村	35.1	9.1	20.8	65.0	24.7	10.3	
白石村	36.3	8.8	20.9	66.0	24.2	9.9	
藻岩村	20.0	16.0	22.0	58.0	34.0	8.0	
豊平町	35.4	13.8	17.0	66.2	26.9	7.0	
手稲村	20.4	22.2	26.0	68.6	27.8	3.7	

(注)『良民』179、1931.9、1-2頁による。

表-15 徴兵検査本籍受験者成績(札幌市・石狩支庁・1931)

徴兵検査の状況については、表・14のとおりである。三〇年代半ばまでしか明らかにできないが、各年、本籍・入寄留を合わせて五、六〇名ほどが受験している。甲種合格者の割合は、三〇四割であった。

一九三一年度については札幌市および石狩支庁各町村の成績が判明する(表・15)。千歳村は一九二四年度には甲種合格者の比率が二〇・〇%で石狩支庁管内で最も低かったが、三一年度においては三一・六%と全十六町村中十一位の位置につけている。ただし第二乙種の割合が最も低く、甲種・第一乙種・第二乙種の合計の割合も最低となっている。甲種から第二乙種までが、徴集人員に該当したが、千歳村の壮丁はあまり体格的に秀でていたとは言えなかった。

表・16は、勤務演習における進級・任官・下士適任証書授与者を示すも

	氏名	階級	出典 (良民号数)
1930	市村政五郎	下士適任証書	168
"	工藤末太郎	歩兵上等兵	"
"	前田政太郎	輜重兵上等兵	"
1931	三海正敏	予備歩兵上等兵	181
"	多田忠進	下士適任証書	"
"	松原敏英	後備歩兵上等兵	182
1932	橋爪英一	歩兵伍長	194
"	西野一久	重砲上等兵	"
"	坂本徳次	上等看護兵	"
"	木本一人	歩兵上等兵	195
"	町田虎松	歩兵上等兵	"
"	市村清市	輜重兵上等兵	"
1933	高橋友市	下士適任証書	207
"	板山正吉	下士適任証書 騎兵上等兵	"
"	川上慶三郎	下士適任証書	"
"	小山田正吉	歩兵上等兵	"
1935	藏谷興松	歩兵伍長	233
"	松村長太郎	歩兵上等兵	234
"	中尾正雄	歩兵上等兵	"
1936	眞鹽正之	歩兵伍長	248
"	安澤健次	歩兵上等兵	249
"	田中仁太郎	歩兵一等兵	"

(注)木本、町田、市村は出典元には、1931年とあるが32年の誤りであると思われる。

表-16 勤務演習進級・任官・下士適任証書(千歳村)

のである。下士適任証書は、「志操確実品行方正勤務勉勵其ノ成績優秀」な各上等兵のうち下士官勤務に服した者、下士官にふさわしい技能を有する者に与えられた。勤務演習における同証書授与は、一九二二年、勤務演習における上等兵進級の道が開かれたと同様、認められている。三〇年代には二〇年代より多くの者が、上等兵に任命、下士適任証書を授与されたことがわかる。彼らはその後、アジア・太平洋戦争に従軍し、さらに進級しつつ任務を果たしていった。

表・17は、第七師団における一九三〇年度現役歩兵の青年訓練の状況を示すものである。青年訓練所修了見込者は二七%、訓練を受けたが修了の見込がない者は二四%、訓練を受けていない者は四四%を占めた。連隊区別では、札幌連隊区の修了見込者の占める割合が大きい。

表・18は千歳村における青年訓練所・青年学校の状況を示すものである。

(単位 名・%)

	青訓修了見込者		青訓修了見込ナキ者		学校教練関係者		青訓不受者		計
	見込者	見込ナキ者	見込者	見込ナキ者	見込者	見込ナキ者	見込者	見込ナキ者	
札幌	330	39.9	192	23.4	43	5.1	262	31.6	827
函館	112	14.6	194	25.3	54	7.0	407	53.1	767
釧路	147	27.3	138	25.6	11	2.0	218 25	45.1	539
旭川	163	25.5	143	22.4	20	3.1	313	49.0	639
合計	725	27.2	667	24.1	128	4.6	1,225	44.1	2,772

(注1) 第七師団「昭和五年度徴集現役歩兵青訓状況一覽表」『良民』170、1930.12による。

(注2) 釧路の青訓不受者のうち25名は、適齡未滿現役志願者。

表-17 現役歩兵青訓状況 (第七師団・1930)

【1929】								
	併置場所	主事	指導員	教練指導員	生徒			
					入所者	修了者	退所者	
千歳青年訓練所	千歳尋高校	1	2	2	18	2	2	
長都青年訓練所	長都尋高校	1	0	2	15	3	2	
劍淵青年訓練所	劍淵尋高校	1	3	2	49	3	2	
幌加青年訓練所	幌加尋校	1	1	2	40	8	5	
計		4	6	8	112	16	11	

	訓練所	主事	指導員	教練指導員	入所者	修了者	退所者
1931	4	4	8	7	116	17	-
1933	4	4	11	7	124	112	12
1934	5	5	14	8	109	98	7
1935	5	5	9	7	76	40	12
1936	5	5	16?		182	72	5

(注1)『千歳村勢一班』昭5、昭6、昭8、昭9、昭10、『千歳村勢要覽』昭11による。

表-18 青年訓練所・青年学校 (千歳村・1929-36)

当初、千歳村の青年訓練所は、劍淵・幌加・千歳・長都の四ヶ所に設けられ、各一名の主事と数名の指導員が置かれていた。三四年には、地区は不明であるが、訓練所が一所増設されている。四〇年八月の時点では、幌加・新劍淵・劍淵・木白・千歳・長都・烏柵舞・千歳鉦山の八校にまで増設されている。入所者数は百名前後で、三〇年代半ばまで二〇年代とほぼ変わらなかったが、三六年には一八二名にまで増加している。四二年度については、教練査閲人員が判明し、千歳一三五、木白一三三、長都一四八、烏柵舞一二四、幌加一三八、嶮淵一四三、新嶮淵一二一、千歳鉦山一

九二、合計四三四となっている。アジア・太平洋戦争敗戦の時点において、兵力動員数は七一九万三〇〇人に達した。そして開戦から四五年八月十四日までの戦没者総数は、一七五万一四〇〇名とされる。戦没者の半数以上は、四年八月、マリアナ諸島失陥以降の「絶望的抗戦期」におけるものであった。同期には、投降を禁じた「戦陣訓」の思想が徹底して実践され、餓死と「海没」死、そして特攻死が特徴的であった。

表・19は、千歳町『元陸軍々人名簿』より作成したものである。同名簿は復員事務に当たって使用されたものと思われるが、名前以外は未記入の箇所が多いなど不備が目立ち、記載漏れの者も多いと思われる。そのため復員軍人や出征軍人の全容を捉えるのは難しい。その点に留意する必要があるが、同名簿では、一

復員										戦死・戦病死		50
20.2	1	21.1	4	22.1	-	23.1	1	24.6	2	病死	1	
8	50	2	5	2	-	2		7	1	未復員	38	
9	83	3	6	3	-	3				所在不明	2	
10	20	4	7	4	-	4		年次不明	339	懲役	2	
11	6	5	21	5	-	5	2	転出・転籍	27	未記入	277	
12	3	6	16	6	3	6	8	死亡	1	小計	370	
不明	1	7	3	7	1	7	-					
		8	-	8	6	8	5					
		9	2	9	5	9	4					
		10	1	10	4	10	3					
		11	-	11	3	11	4					
		12	1	12	4	12	1					
						不明	1	小計	655	計	1,025	

(注1) 千歳町『元陸軍々人名簿』より作成。

(注2) 転籍には、19年転籍2名を含む。

(注3) 一部、千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』(1954) によって補った。

表-19 復員調 (千歳町)

九二、合計四三四となっている。アジア・太平洋戦争敗戦の時点において、兵力動員数は七一九万三〇〇人に達した。そして開戦から四五年八月十四日までの戦没者総数は、一七五万一四〇〇名とされる。戦没者の半数以上は、四年八月、マリアナ諸島失陥以降の「絶望的抗戦期」におけるものであった。同期には、投降を禁じた「戦陣訓」の思想が徹底して実践され、餓死と「海没」死、そして特攻死が特徴的であった。

年齢	人数	年齢	人数	年齢	人数	年齢	人数
16	1	26	41	35	33	44	6
18	10	27	59	36	35	45	1
19	36	28	40	37	24	48	1
20	64	29	52	38	21		
21	56	30	43	39	8		
22	64	31	52	40	6		
23	60	32	54	41	7	不明	47
24	44	33	45	42	6		
25	59	34	40	43	10	計	1,025

(注1) 千歳町『元陸軍々人名簿』より作成。
(注2) 年齢は、1945.8.15時点でのもの。生年のみ判明するものは、誕生日を迎えたものとして数えた。

表-20 年齢 (敗戦時)

会社員	11	自作農	215	製炭業	16
事務員	4	自小作	3	電気工	7
官公吏	12	小作農	2	日 雇	8
少年院	5	農 業	35	その他	87
運転手	9	郵便局	6	なし	3
鉦 夫	8	鉄道員	7	不 明	587

(注) 千歳町『元陸軍々人名簿』より作成。

表-21 職業

〇二五名の記載が確認される。そのうち復員が確認できる者は六五五名で、その他、戦死・戦病死五〇名、病死一名、未復員三八名、所在不明二名、懲役二名、未記入二七七名、合計三七〇名となる。復員の時期については半数が不明であるが、復員が多い時期としては、二十年八月、二十一年五月・六月が挙げられる(表・19)。

表・20は、名簿より四五年八月十五日時点での年齢を計算したものである。最少は十六歳、最高は四十八歳で、平均年齢、二八・〇一歳となる。また表・21は、名簿より職業の分布を示したものである。半数以上が不明であるが、農業従事者が多かったものと推測される。

千歳町は一九五四年に『千歳町戦没者追悼写真帖』を刊行している。ここでは、陸軍一八二名、海軍五二名、計二三四名が掲載されているが、より正確な情報が記載されていると考えられ、不備の多い、『元陸軍々人名簿』

を補うことができる。『名簿』では戦死・戦病死者五〇名だけであったが、『写真帖』からは、陸軍では、日中戦争二名、アジア・太平洋戦争一五六名、海軍では、日中戦争一名、アジア・太平洋戦争五一名の戦没者が判明する(表・22)。戦没者の数からみても、アジア・太平洋戦争がそれ以前の戦争とは規模を全く異にする、大戦争であったことがわかる。表・23は、

陸軍 (182)

日露戦争 (3)		日中戦争 (21)		アジア・太平洋戦争 (156)					
奉天	1	北海道	2	北海道	4	北支	8	アッツ島	4
旅順	2	内地	3	内地	5	中支	10	キスカ島	1
		朝鮮	3	千島列島	3	南支	5	マリアナ群島	4
		満洲国	1	硫黄島	3	ソ連	5	メレヨン島	7
満州事変 (2)		北支	8	沖縄	36	東シナ海	1	ニューギニア	6
満洲国	1	中支	3	朝鮮	2	フィリピン	14	ブーゲンビル島	3
北支	1	南支	1	樺太	6	仏印沖	1	ガダルカナル島	7
				関東州	1	ビルマ	4	マーシャル諸島	2
				満洲国	7	インド	1	その他	5

海軍 (52)

日中戦争 (1)		アジア・太平洋戦争 (51)					
内地	1	北海道	3	ボルネオ	1	マーシャル諸島	2
		内地	10	マラッカ海峡	2	ギルバート諸島	1
		千島列島	1	東インド諸島	1	南洋群島	2
		小笠原諸島	1	チモール島	1	南太平洋	2
		種子島	1	マリアナ群島	2	特務艦「富士」	1
		沖縄	1	メレヨン島	1	不明	1
		南西諸島	1	ニューギニア	2		
		東シナ海	1	ブーゲンビル島	1		
		フィリピン	11	ソロモン諸島	1		

(注1) 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。

(注2) アジア・太平洋戦争期は、1941.12.8以降を示す。

(注3) 「北支」、「中支」、「南支」の区分については、出典元のまま。

(注4) 「その他」は、台州列島、バシー海峡、バラオ、ナウル島、「マレー—バリージャワ」。

表-22 戦没時期および戦没地 (千歳町出身者)

	戦没者			備考
	陸軍	海軍	計	
41.12~43.1	16	2	18	戦略的攻勢期
43.2~44.7	34	13	47	戦略的守勢期
44.8~	103	35	138	絶望的抗戦期
不明	3	1	4	

(注1) 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。

(注2) 時期区分については、吉田裕・瀧綱厚「日本軍の作戦・戦闘・補給」藤原彰・今井清一編『十五年戦争史3』青木書店、1989年を参照。

表-23 戦没時期（アジア・太平洋戦争）

陸軍		海軍	
少佐	2	大尉	1
中尉	2	兵曹長	2
少尉	1	上等兵曹	1
准尉	3	一等兵曹	4
曹長	4	二等兵曹	12
軍曹	14	水兵長	8
伍長	51	上等水兵	11
兵長	46	一等水兵	3
上等兵	42	三等水兵	1
一等兵	8	軍属	7
二等兵	1	不明	2
軍属	8		
計	182	計	52

(注) 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。

表-24 階級

戦没者を階級別にみると、将校は六名であり、ほとんどが下士官兵であった（表・24）。また年齢別にみると、二〇代前半に集中している（表・25）。これを表120と比較してみれば、従軍者のうちでも経験の少ない二〇代前半の若者が多くを占めている。

戦没者の多さは、当然、出征・応召者の急激な増加をも物語る。戦没地は、陸軍では沖縄、海軍では内地やフィリピンの多さが注目されるほか、中国や東南アジアから太平洋上の孤島まで多岐に亘っている。大日本帝国の版図の膨張に伴って、千歳出身者の任務範囲も地球規模の広がりを見せ、行く先には玉砕や餓死が待っている絶望的な状況に投げ込まれたのである。ソ連とあるのは、収容所で亡くなった者を示し、また「南太平洋」や「南洋群島」とあるのは、死没した場所がおおよその範囲でしか判明しないことを示している。

年齢	人数	年齢	人数	年齢	人数
17	2	26	9	35	3
18	2	27	6	36	1
19	1	28	5	37	2
20	9	29	4	40	2
21	17	30	6	42	1
22	29	31	3	43	1
23	29	32	5	56	1
24	22	33	4	不明	8
25	9	34	1	合計	182

(注1) 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。

(注2) 生年のみ判明するものは、誕生日を迎えたものとして集計した。

表-25 戦没者年齢別（陸軍）

しばしば指摘されてきた。それは敗戦時に兵事書類の焼却が命ぜられたことによる史料上の制約が大きな原因となっているが、本稿では、帝国在郷軍人会札幌支部刊行の雑誌『良民』を用いることによって、千歳村（町）と兵事、地域と軍隊の問題にアプローチした。原田敬一氏は、「軍事ジャーナリズム」という史料領域の有用性を指摘しているが、自治体史においても、失われた兵事書類の穴を埋める存在として「軍事ジャーナリズム」が重要である。『良民』に関して、本稿では千歳村（町）に関する部分を使用したが、他市町村における地域と軍隊の問題をとりあげる際にも有用であると思われる。

小池善之氏は、自治体史において、「地域の歴史的展開と『大日本帝国』のそれとは、あたかも無関係に存在しているかのような記述が多い」ことを批判している。近代日本は、諸外国との戦争、そして周辺地域の植民地化を推進するなかで形成されていった。戦争や植民地化は、現象的には対外的な関係として現れるが、それは同時に対内的問題でもあり、地域も無関係ではいられなかった。それゆえ、「大日本帝国」の構造に組み込まれた

半の若者が多く犠牲になったことがわかる。

おわりに
以上、一九二〇～四〇年代における千歳村（町）と兵事に関して考察してきた。自治体史においては、地域と軍隊との関わりについての記述が薄いということがしばしば

ものとして、地域を認識し、叙述する必要がある、と小池氏は述べている。本稿においても、「大日本帝国」を構成し戦争遂行を支えた一地域という観点からの叙述を心がけたが、まだまだ十分なものとはいえない。今後史料を発掘しつつ、叙述を深めていきたい。

註

- (1) 『良民』一八一、一九三二年十一月、一〜二頁。
- (2) 『同右』二〜四頁。
- (3) 千歳村役場『陳情請願書類』自大正十二年、千歳市役所市史編さん担当所蔵(N.o. 4)。
- (4) 『良民』一八一、一頁。
- (5) 歩兵第二五連隊陸軍中佐・吉田定男は、『道民』一六一―一(一九三一年十一月)誌上において、「柳条溝に沿ひ、計画的に鉄道の破壊を企てた支那暴兵を討伐すべく、小官は時を移さず出向ひ、当中隊は奮戦力闘、忽ち敵を撃滅せしめました」とする福田大尉の書信を紹介している。また北大総長を務めた佐藤昌介は、同誌において、「敢然として暴戻支那を粉碎しなければならぬ」と述べている(『同』一六一―二、一九三二年十二月)。
- (6) 『良民』一八九、一九三二年七月、三頁。
- (7) 『良民』一九三、一九三二年十一月、一頁。
- (8) 混成第十四旅団司令部『昭和七年九月自二十四日至三十日衛生業務旬報』、同『昭和七年十月自十一日至二十日衛生業務旬報』(JACAR ref:A03032171600)、「混成第十四旅団戦闘経過要図」『良民』二二〇、一九三四年三月。
- (9) 『良民』二〇一、一九三三年六月、二頁。
- (10) 『良民』二〇一、三頁。
- (11) 『良民』二〇一、一〜四頁。
- (12) 一九三六年度には「満洲国軍用通信処要員」、また「満洲国警士」については北海道の募集がないとされている。『良民』一三七、一九三六年五月、二九〜三〇頁。
- (13) 「関参満四一五」関東軍参謀長より陸軍次官宛、昭和七年十一月十二日、ref:C04011915700。
- (14) 『良民』二二八、一七頁。
- (15) 『良民』二五四、一九三七年九月、一七頁。
- (16) 「軍人会館建設ニ関スル件通牒」帝国在郷軍人会理事より連合支部長・支部長・連合分会長・分会長宛、昭和三年四月七日、ref:C04016007800〜900。
- (17) 「軍人会館建設中央委員長・稲垣三郎「会館建設の高調を望む」『良民』一六六、一三〜一五頁。稲垣は、在郷軍人会本部総務理事であった(『良民』一六九、三頁)。
- (18) 「軍人会館建設寄附金に就て」『良民』一六八、一六頁。一九三一年十月の第七師管連合支部総会において、総務理事は、「本会の一大事業である軍人会館の建設も諸君の御共鳴に依り今や細部の設計を進めつゝあり敷地整理にも手を付け初め着々進歩しつゝあります。殊に本道各支部の出金成績は各八〇%以上に達し旭川支部の如きは全国に先んじて完納せられて居る次第であつて諸君の御努力に対しては感謝に堪へぬ処であります」と述べている。「総務理事口演要旨」『良民』一七八、一九三二年八月、八頁。
- (19) 「謝状」『良民』一八七、一九三二年五月、一二頁。
- (20) 「軍人会館「我等の軍人会館」『良民』二二二、一九三四年五月、一三〜一六頁。『良民』二二二号の表紙は、軍人会館の写真が飾った。
- (21) 細川は「昭和十五年度有効表彰者」として、『良民』二八七号(一九四〇年

六月)に写真付で掲載されている(二〇頁)。

(22) 一九三六年頃の会員数は、一七六名とされている(『千歳村勢要覧』昭和十一年度)。

(23) 『良民』特別大演習号、一九三六年九月、二六頁。「御親閲拜受者」は、「思想堅実ナルコト」、「身体強壯ナルコト」、「団体行動ヲ為シ得ルコト」がその資格とされた。『同』一一二頁。

(24) 前田は、二〇歳のとき(一九二〇年頃)、現役志願しているが、その動機に關して、「故細川孫作氏が、千歳に帰ってきた時、軍服に赤い長靴をはいていた。そのスタイルにあこがれてしまった」と回想している。前田は、軍隊で蹄鉄の免許を取得後、千歳で蹄鉄業を開業した。『道央の百人』一六二、『千歳民報』昭和四十七年五月十四日。

(25) 『良民』二三七、一九三六年五月、二五頁。

(26) 『同右』二六五、一九三八年八月、一四頁。

(27) 『同右』二二〇・三頁、二二二・二頁、二三五・五頁、二四八・六頁、二六〇・一八頁、二九六・一七頁。

(28) 『皇魂』三二〇、一九四二年五月、七頁。石狩支庁ではほかに、江別国民学校、石狩国民学校に開設されている。

(29) 一九〇九年に各兵科各部統一の付与規則が制定された。明治四十二年陸達第三十号。

(30) 大正十年陸達第三号、陸軍下士適任証書付与規則改正、大正十年一月二十五日。

(31) 一九三五年、青年訓練所は青年学校に改められた。

(32) 『良民』二二九(一九三四年十二月)の表紙には、「千歳村長都青年訓練所自転車隊分列」の写真が掲載された。

(33) 札幌連隊区司令部「昭和十五年札幌連隊区管内青年学校教練査閲日割表(其

ノ一)」昭和十五年八月、『良民』二九〇、二二頁。

(34) 札幌連隊区司令部「昭和十七年度札幌連隊区管内青年学校教練査閲日割表」昭和十七年七月二十日『皇魂』三二四、十九頁。なお、一九四二年五月一日より千歳に町制が施行されている。

(35) 大原社会問題研究所編『太平洋戦争下の労働者状態』東洋経済新報社、一九四四年、一三三頁。

(36) 吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』吉川弘文館、二〇〇七年、一三三六〜一三六三頁。

(37) 石狩支庁管内の自治体史において、戦没者名簿や戦没者数に言及しているものは、管見の限り、『新札幌市史』以外見当たらない。札幌市の戦没者は、昭和二十七年時点で三七〇〇〜八〇〇〇人とみられている(第五卷、五〇三頁)。

(38) 小池善之「自治体史における『帝国』の欠如」『地方史研究』五六―四、二〇〇六年八月。

(39) 前号刊行後の調査で、札幌市文化資料室において、『良民』二三号(一九一八年十一月)〜三八号(一九二〇年二月)の写しを確認できた(ただし、二七、三三号欠)。原本については「札幌教育大学」と記されているが、所在は確認できていない。